

『経営に役立つヒント』

令和五年七月一日

第二百四十二号

来年の新一万円札の顔として、日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一が経営者の間で見直されています。

アメリカの凋落と独裁国家中共の台頭という世界の状況、三十年続く日本の低成長と少子高齢化等々の原因があり、我々日本の経営者が、先行きに対して正しい方向を模索し、歴史に答えを求めているからではないでしょうか。

『論語と算盤』は栄一が「道徳経済合一説」を唱え、日本人の魂である、武士道や大和心をベースに、国を富まし、会社も富むことを自ら実践したものです。それだけに説得力があり、今も読む者を魅了するのでしょう。

「温故知新」故きを温ねて、新しきを知る。論語の有名な一節です。二千五百年前も、今と同じように、答えを過去の原理原則に求めたのです。道元も親鸞も画期的な天才的な新しいものを発見した訳ではないのです。

栄一の子孫の渋沢健さんも「栄一の言葉は減ることがない財産であり、むしろ、その言葉を現在に解釈して活用すれば、増える財産なのです。この財産は、相続税も掛からない財産です」と語っておられます。

「勉強を習慣とすれば、必ず勉強せざるを得ぬようになる。怠惰を習慣とすれば、怠惰はさらに怠惰を生ずるに至る。およそ怠惰ほど悪癖を生じ易いものはない」人生は習慣の織物で、どう織るかは、我々の心構え一つであるということです。良い習慣を身に付けましょう。今から、良い習慣に切り替えて参りましょう。

「志すことは必ず行わなければならぬ。行わざる志は、空砲である。無駄花である」口先だけの評論家や傍観者になっではいけません。我々は実践者です。

「人は誠実に努力してもって運命を待つがよい。もし失敗したら自己の智力の及ばぬためと諦め、さらに力を尽さねばならぬ。かくの如くしてあくまで勉強するならば、必ず好運命に際会する時がくる」これも人生の辛酸をなめ尽した深く幅広い栄一の魂の言葉です。今、悩み苦しんでいる我々への熱いエールです。もう一步、あと一步、諦めずに粘り強く頑張ります。

大きくは日本の将来のため、地域社会のため、中レベルは、自社の従業員のため、自社の発展のため、小さくは自分の家族のため、自分のために。社長、共に渋沢栄一に学び、活きニコニコ勇往邁進して参りましょう。

今月のポイント

古典は古くて新しい!!

